

65

60

55

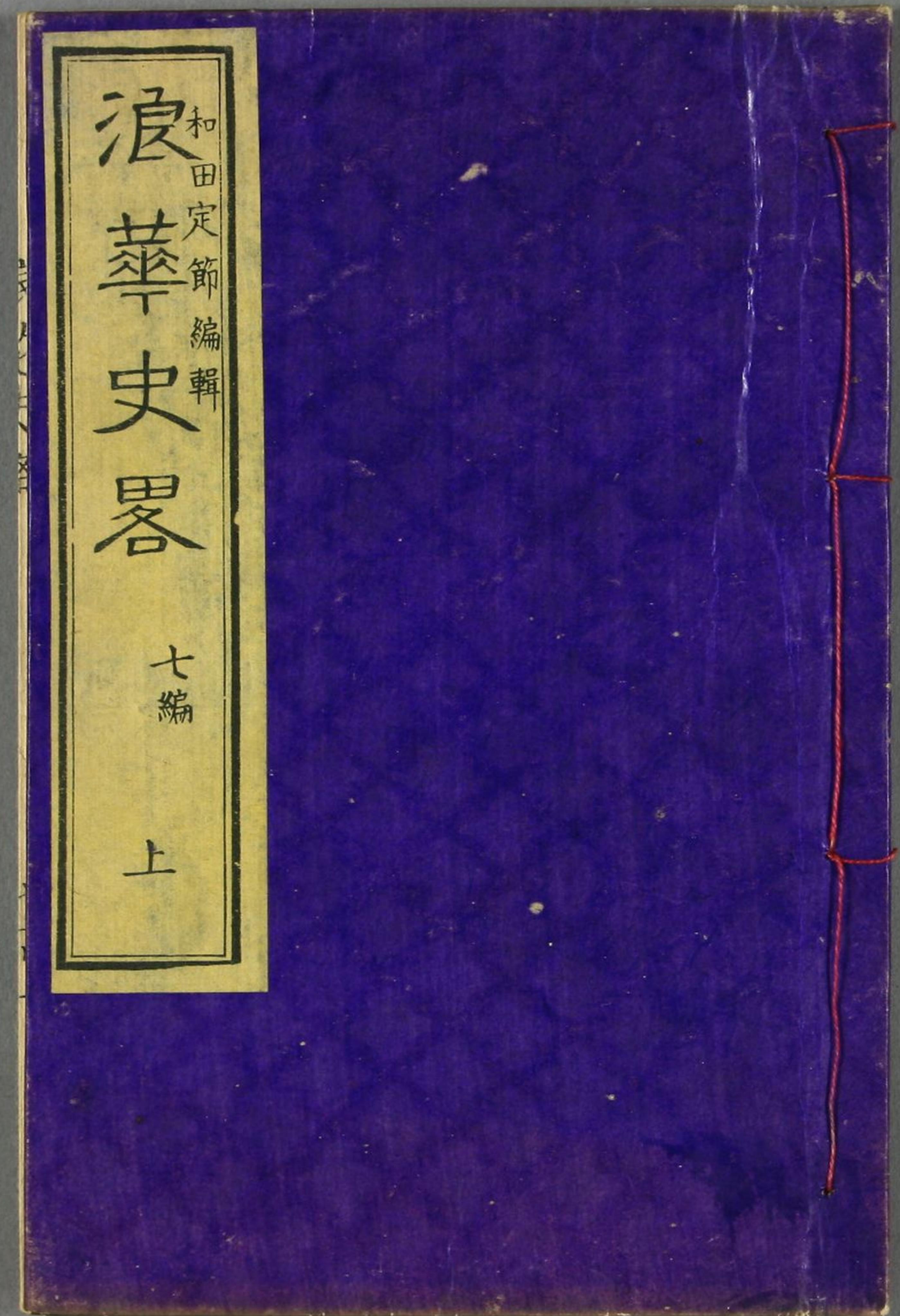
50

浪華史畧

七編

上

和田定節編輯



A 404

11

010190509350

48-7646

序

傳古ノ新ノ傳ノ歴ノ事也。已傳々ノ被否軍より徳川治  
華藏ノ進遷時、徳古豈氏が時、  
樹是より得。有種代想像。其徳古誰が始  
初。古傳事より之物。名のみ取りけり。口  
吟葉を現す。十四年。春。秋。冬。夏。秋。  
彼は死端越え。休軍を以て。己が零落。哀歎  
つゝ。寒。易。ま。れ。よ。生。識。と。遇。と。あ。ば。寢。

のりす。文部省が序文致せよと需り來一月  
往來事は略と。おりほざの御子は總の様と爲め  
獨創人達の功を賞せた義。墨をなれば何の免  
ほん想の辭席言々代て書まつ。形堂  
不時明治十四年十月江村東京銀座  
主鎬衝の少佐寵機より持

松耶櫻雨雙識圖

藤堂高虎

朝暮欲  
離タ半  
復表裏  
人



越前少將忠直



真田幸村妻



夫仕有  
貞操  
依佛自  
守戒

井伊直孝

功勞補  
大樹  
保二百  
年壽

繪本難波戰記三編卷之三

東京 和田定節編

大城將ら勇戦戦死附兩將軍大坂ふ着陣  
再説後藤基次薄田兼相渡辺尚ら各部下の兵城  
廻キテ勇戦アサシたまタマりくドモ敵アシカへ同小餘アマる大軍  
味方ミカニへ續ツヅクく兵ヒ少シく今イマへ漸次小戦死アラジる總放軍ト  
なうんざハ元ハけキをハ基ハ次ハ手ハ勢ハをハ引ハ經ハむハノハ僅ハ多ハ  
小十一騎ハとハあハりハうハり因ハく兼ハ相ハの軍ハ不ハ使ハをハ多ハ

予へ後軍の至るを待ち俱ふ敵と敵とべ一吾將  
ふ此處よ死せんとあるたりと云せ残兵十一騎  
を引率一敵の大軍を目避け突き入る猛勢激烈  
なれバ本多忠政松平忠明伊達政宗の老臣片倉  
景綱ら士卒ふ指揮一一小款とりくども必死をき  
ば悔了べくうじとく小銃を連發さまきバ飛丸  
醜の沃ぐぐ如一伊達家の銃手萩又市ダ放つ銃  
丸基次ダ腹部の致命ふ中り馬よりどくと薙け  
凡基次ダ腹部の致命ふ中り馬よりどくと薙け

キバ徒士ら基次を援け柏原迄引揚遂ふ死  
至松平忠明の家譜ふ曰ふ是役忠明の臣山田十  
郎兵工後藤基次を討取り十兵工も亦戦死を  
トリグチラ是ちトん薄田兼相ハ基次の依頼を  
受け一ダ冬の役藏ダ寄の守備を怠り權須賀至  
鎮の為ふ破りき一ダ深く恥ぢ是役諸将ふ先づ  
つ々戦死をきんと期死せ一ダ手勢を下知  
四方の款ふりて奮撃突戦を一鑑ふあくま

鮮血ちりがまづり一ト息いきづんこせ一廻とまわへ多野たの猪成の  
従士じゆ河村新八馬乗まよめ鎗よを槍槍つゝ兼相かねあふ突  
くうくう兵ひを得えて馬まを返もど一暫時ざんじ戰たたかひを挑いどむ  
とつとども先刻せんくろよりの激戰げきたん小深こぶかを數かケ所しょを負  
ひくをしんの新八しんぱ爲あらわふ遂ついよ討取とうとりらきうり此時大  
野治長おぢながへ前軍まへぐんの敗報ひはうを聞き援あ兵ひ代だい繰く出だ一打掛  
里さと來ききども猶もろうなる東軍とうぐんの大兵だいひふ掛か立た  
を立たつあくなく放はなきほ大谷おおや大學吉亂切齒きつぎ切齒きつぎを口くち  
きたあれ大野敵おおののとあの活振舞かくしんまいうす某もしが軍ぐんと活覽かくらんあ  
きとあ勢あぜと真丸ままるふ備そなへへ東軍とうぐんへ面おもてもあづば実じつ  
入り縱横じゆうようふ暴ぬけれ廻まわり遂ついふ戰死たたかひをあくあくけ室  
此このひくよ治長おぢながへ走はしつて城じゆうふ入いりる是これ不於ふおて渡わた辺  
尚ひの道明寺どうみょうじ不陣ふじんある真田幸村まさだこうそくふ人ひとを馳かせ急いそ  
と告ごげ基次きじ兼けん相あら戰たたか没ぼつ一治長おぢなが退しりぞき吾衆ごしゅうも亦手て  
負ひ多た一子いっし請うふ東軍とうぐんと食留しりぞよと幸村諾こうそくて軍代ぐんたい  
進すすむ伊達政宗いだまさむが戰士せんしき真先まへ不進ふしん來ききば幸村こうそく部ぶ

下より指揮一兵を引て譽田の東の阜より上り阜の  
凹き處より陣成布き其兵卒不命ト皆兜と脱せ槍  
武委坐して以て指麾と後を伊達家の軍士ハ騎  
戦小長ざクバ常小勁騎八百代出一馬上より  
銃火發らせ烟よ葉ドテ馳せ突きのせ敵軍  
と摧き破少セ以テ伊達氏志一ノ東國不得  
幸村之を知故斯ハ備へて行うるやう伊達の軍  
隊勝小棄ト騎兵と真先ふ備へ進ミ来リ相去る

五六歩不及ぶ幸村令一テ曰ふ槍と執キと  
伊達の騎兵銃を發一烟々々少馬を馳せ驅け惱  
まさんと真田の兵士ハ坐を下シふ槍を構ヘ  
馬足が沮む恰も薄の穂の如一伊達の騎兵進ミ  
得ばたりらふと刀を手幸村又令一テ曰ふ皆  
起と兵士皆起上り了人のきひなく突立難立  
まふと指うを東國ふ名を得一騎兵も戮ふ御な  
く路を争ひ逃げ出し後陣ふあざれくう一ダ後

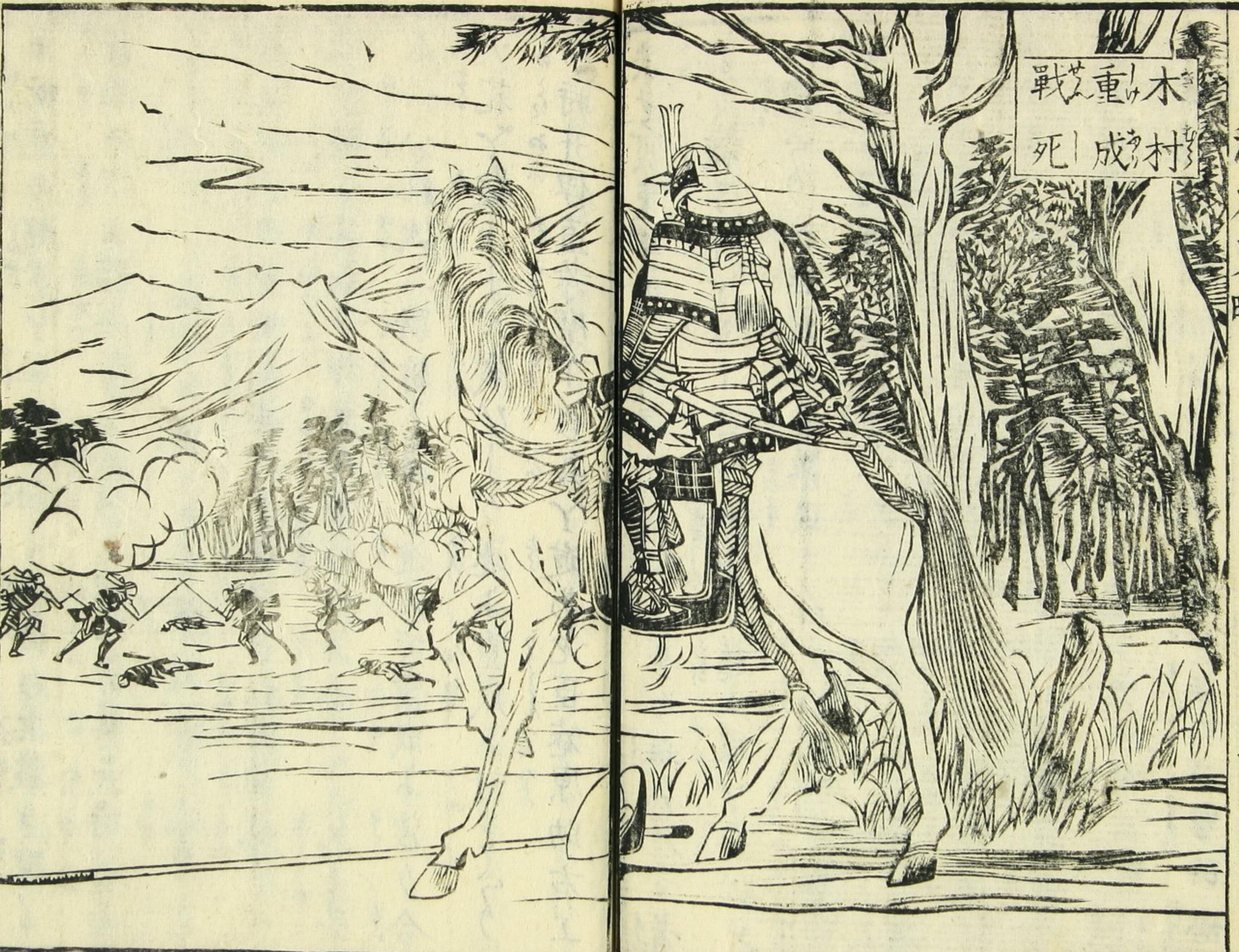
軍も亦備々乱に幸村莞爾と打笑ひをもくと下  
知らせば真田が零兵機ふ棄ト臂の指をせよが  
如く指揮不應にて戦ふふぞ伊達の一軍總放軍  
とちり散乱を幸村へ軽く兵を引揚げ轉じて南  
の方の阜不陣一ぐり時小水野移成使と馳せ伊  
達政宗と促へて曰ふ公中軍城進め幸村が横撃  
ふ備つむきよ吾城兵の退くと追ひ討ち隻騎と  
一て返すト一わざと本多忠政松平忠明らも亦之  
促は政宗兵渡を丸留ふ所以て辭は此時一桿  
監物直盛越後の部下ふ在り進んで前軍と援け  
んことを伏請ふ忠輝肯せざりて止む幸村東軍が  
進まざるを見兵を收め渡辺尚と更ふく駿ノて  
退きより是日藤堂高虎一軍を領へ平塚より南  
道明寺ふ趣く其族將葛堂仁右工門高刑葛堂新  
七郎良勝前軍を率ゐて進む渡辺勘兵工了自ら  
斥候を爲へ還り報げて曰ふ乃ち明る置聲西ふ

漸微なり故已ふ放るをばんうと乃ち鞭を  
擧げ左を指して曰ふ矢尾若江故有うと高虎使  
を馳せ先陣を過め旆を轉て左ふ向ひむ勘  
兵工曰ふ茲地沮洳請ふ別路小由て進すんと乃  
ち馬を馳せて令を傳ふ仁右工門新七房ら顧き  
ばりて追え八尾の堤ふ至る長曾我部盛親矢尾  
の堤ふ上り藤堂家の旗を望兵を退けて堤の下  
よ伏せり仁右工門新七房の城兵城へび

走りゆりと誤認士卒ふ下知一田を徑に備を乱  
ト走きざりんと堤ふ上る盛親大りよ呼んで曰ふ  
時かひよ死ぞと下知みつれ行ひけらる部下  
の兵士八方より起り立ち藤堂の隊へ突入一東  
西ふ斬り祓ひ南北ふ聲ち違ふ不意を聲き  
堂の軍卒四度路ふ成り右往左往ふ散乱をれば  
隊将高刑良勝ら踏止り奮闘をせども遂ふ叶ひ  
ば高刑良勝乱軍ふ戮死に盛親の兵克ふ葉ト進

之來をば渡辺勘兵工ら隊々立直たて盛親の軍よ  
渡り合ひ使と馳せて大將高虎又中軍と追めん  
と嘆請ふを先す刑良猿が戮死と聞き勘兵工が  
二将を赦へざるを怒り肯ぜば勘兵工奮戮盛親  
も亦其破り難き爲計ため兵を引揚ひきあげくば勘兵工  
ら故兵と杖め近傍の小高き阜ふ陣じんへたり是よ  
里先井伊直孝の一軍道明寺ふ走き左ふ射あにて  
城將木村重成が一軍と若江の堤提を革ひ猿放さなげ

決せば東軍の二將長坂某曰ふ先づ堤提を得る者  
務むり銃手隊じゅうしゅたいを督しらべ一銃一を激射げきしゃ遂ふ堤提を奪だつひ之  
外據おきすり舞櫛家まいりきやの槍隊きょうたい進すすみんと欲ほひ老臣ろうしん巻原  
助すけ扁丘門圓へんきゆうもん玉靈ぎょくれい小槍こじょうを用もちふる勿むき靈れいふ槍やりを用もち  
也まか則そ敵逃とうとうづれて鬻竭よかつんと衆之しゆを冒あ一進む  
重成自ら槍やりと擣うちり挺たてふ進すすみ井伊の前軍ふ突入  
至いたる幸さいい突つき伏ふせば馬ば巴ばの字ふ衆しゆ廻まわ  
一近寄ちかよる者ものの鎧よふうけ大勇猛だいゆうもうと頭かしらの没まつひ恰



も猛虎の群羊を驅るべ如く井伊の兵披靡く  
勇ぬの下小弱卒を木村が部下の兵大將討す  
なとおくる猛威を摧うき東軍大つて效是東  
将山口修理亮重政其次子長次亦弘陰奮戰一  
傷と被る其長子伊豆守重信の深入ノ父と尊  
ふ引分れ故ニ騎斬落へ進んで重成を渡り合  
火花を散トテ戰ひ一ヶ遂に重成を討ちテ  
此時井伊直孝麾下の兵を遣り老臣菴原助右工  
門隊を整へ銳進を重成が軍隊へ又之を打撃ト  
んと必死を期して戦ふとつくじゆの最前よりの  
戮ひふ力疲れ一兵をれば新兵の軍を打破らき  
士卒略残死せり重成效兵と共に罷ふ據り息を  
つむ居る東軍克ふ棄ト迫ること急かし飯島三  
弟左工門重成を扼めて曰ふ盍城を還らざる  
重成頭を掉り残兵を率ゐて之をばくり士卒皆  
死後重成自若として動くば菴原助右工門馳せ

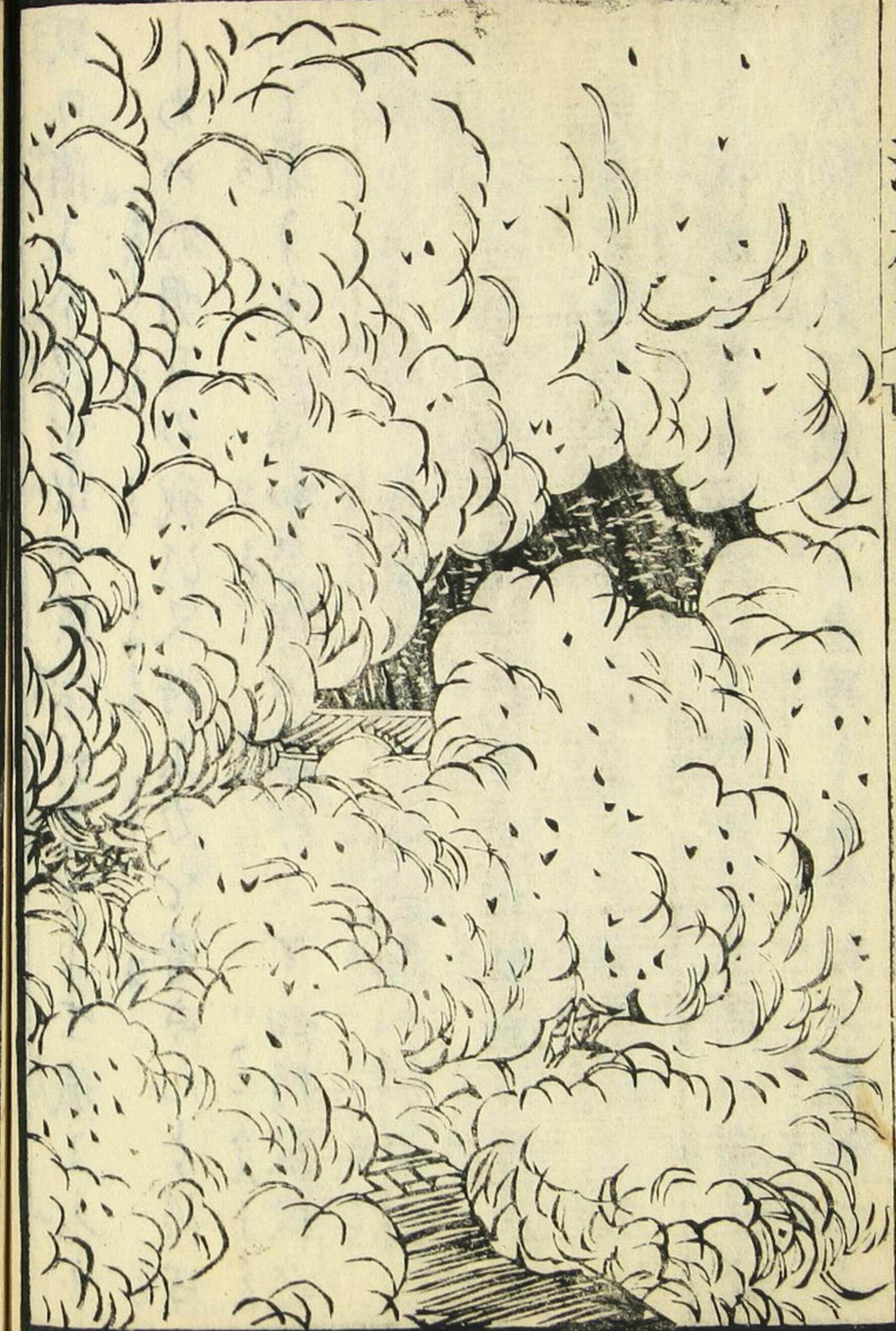
勤て重成を刺し井伊の臣安藤長三亦首を獲  
り長三亦直木之と牙營を献ト前將軍之を検査  
を兜纓餘りあくべ頭髮香有り者乃嘆惜  
て曰ふ是頃死を決ひたがりと重成時不年  
二十三今日親らお取了者山口重信らを始め三  
十餘人ふ及ぶ其勇も亦餘り有りと云ふべ  
編者曰ふ重成の戦死諸説皆実と現不河歩  
若江の憤墓今猶存せり然ふ近年重成の子

孫者世ふ名を著へたりとの説び重  
成の戦死も亦虚なりしう将送児の有る有て民  
間ふ生育一ぐ虚実まぐ詳くれば  
井伊の全軍勢ひふ衆ト追撃するよ一里餘ふ  
く長曾我部盛親の軍艦を見た直孝其遊軍ふ指  
揮一横より盛親の軍ふ迫る之ふ機知得て渡辺  
勘兵工ら奮起して盛親の軍遂ふ放れ走る増田  
長盛の男兵太夫盛次盛親ふ属へて軍中ふ在り

追い来る東軍と喰止り血戰ひ然れども兵續ふ  
おして戦死と遂げり勘兵工ら進んで平野橋  
を扼し復入シテ高虎を促ゲー道明寺の攻兵  
を邀えんと欲き高虎曰ふ斯奴死處ふ死ば今何  
ぞ嘵嘵<sup>さざざ</sup>歸師を遇む勿れ宜<sup>よ</sup>速<sup>すみ</sup>ふ兵を  
取むべーと時ふ軍監使至れり勘兵工迎えて言  
ふ陪臣敢<sup>あ</sup>く請ふと有<sup>ア</sup>盜犯遁<sup>の</sup>と<sup>シ</sup>ソ<sup>シ</sup>  
幸村うお不至<sup>シ</sup>りんと<sup>シ</sup>所要<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>鑿<sup>ハ</sup>せば<sup>シ</sup>判大  
坂の陥<sup>ハ</sup>今夜<sup>シ</sup>出下<sup>ハ</sup>幸村等<sup>シ</sup>して城<sup>シ</sup>ふト  
一わば判明日の戦<sup>シ</sup>又將<sup>シ</sup>ふ力<sup>シ</sup>費<sup>シ</sup>んと<sup>シ</sup>臣  
之<sup>シ</sup>を策<sup>シ</sup>ふ至<sup>シ</sup>熟和泉守<sup>シ</sup>聽<sup>シ</sup>ざ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>如何監使<sup>シ</sup>之  
を然<sup>シ</sup>りと<sup>シ</sup>往<sup>ハ</sup>て高虎ふ説<sup>ク</sup>高虎答<sup>ヘ</sup>日己<sup>シ</sup>ふ  
暮益勅兵工を促<sup>シ</sup>一兵<sup>シ</sup>收<sup>シ</sup>ら<sup>シ</sup>を勅兵工遂<sup>シ</sup>火  
を民衆<sup>シ</sup>縱<sup>シ</sup>ち稼<sup>シ</sup>示<sup>シ</sup>退<sup>シ</sup>直孝<sup>シ</sup>高虎の營<sup>シ</sup>  
赴<sup>シ</sup>我捷<sup>シ</sup>賀<sup>シ</sup>高虎曰ふ我小怯夫有<sup>シ</sup>多く我  
良代喪<sup>シ</sup>是<sup>シ</sup>憾<sup>シ</sup>と為<sup>シ</sup>耳<sup>シ</sup>と直孝曰ふ僕若江よ

演義

三



良史

七上

放陣之火營圖

里矢尾ふ赴き貴部の一将席幟と樹と歎と追ふ  
シテ指揮甚観了べ一斯人も亦死せりや否と  
高虎嘿然うり劫兵工兜を免進んで曰ふ席幟ハ  
即臣なりと因て其属兵を呼ん曰ふ掃部君褒  
詞有り我輩徒勞をうせとは是日神原遠江守康務  
康政らまえの子半管江ふ至り故乃木村主計頭宗明伯父と  
我ふ康務瘍を患ひ脛汁流れて鎧小至了と物と  
わせば勇奮にて士卒を励む宗明の軍被破り  
木村が軍を撃入るゝ為し、又軍監若圓能をす  
信吉之を扼りて聽さば故ふ兵を取む越前守將  
忠直の其老臣本多飛彈守成重らと四條畷ふ陣  
一升伊の軍後ふ在り皆事不逮をざり兩將軍先  
鋒の戦ひ酣るゝ代聞き中軍を以て之の繼んと  
欲を捷報累々ふ至り首虜を馬前ふ効ひ時已ふ

日暮る前将军千塚ふ次り将军道明寺ふ次りは  
令々下りて曰ふ詰朝城々攻めよ先鋒残疲を  
テ他軍々以て之ふ易ふべーと忠旗忠直皆軍  
々進めば下知の旨々失一けれど忠直本多成重  
が一て前将军ふ稟うむすふ明日の残ひに越  
前の兵ハ何をふ陣せんやと前将军罵つて曰ふ  
暗夫晏起して事ふ逮ばば尚何々言ふ哉と成  
重ら惄忍還り報ドく曰ふ君努力せよと忠直乃  
ち其士ふ徇うて曰ふ明日我先登せざれば則先  
死をん死々怖々者ハ此より去きと士卒勇憤  
一て余ふ従ふ小笠宗秀政も亦監軍ふ残機々誤  
らき了底恨む本多出雲守忠朝忠勝其戚属を  
秀政夜往く忠羽不面ノ了日ふ明日ハ吾尺前有  
リ寸郤ちと忠羽曰ふ子我心々得アリト  
是役忠羽の營廻済淮多キ々病ひ之を易んこ  
と成清ふ弟の軍曰ふ乃父戦のるふあ嘗て險

と易と同のぞ若何ぞ肩すゝやと忠羽愁恨  
左近が経ふ秀政と死と約せたり  
大坂城中ふの務放如何あらんと諸ねら序壁を  
呑み報知を待てふ監視幸村らと平桂より退き  
火矢聚落ふ縦ち坂ふ入り三处の軍皆放き忍耐  
多く死一けれど坂井色を失ひ猪乃浅口と曰ふ  
今日の怨念を皆失て各自戦ひて居ほゆ志を  
消ざる所以あり明日の諸軍力を合せつ戦にて

以テ唯雄と決ばべーと秀頼之と幸村ふ諒ふ幸  
村曰ふ臣清ふ条白山ふ陣にて敵を傍へん明石  
掃部川場より發今宮の南ふ出立火と歎背ふ  
奉げ其中軍隊夾立撃ち主公旗鼓を建て之ふ繼  
ぎを奉或ハ克んと秀頼及び猪乃師之ふ従ひ同  
七日の未明幸村ハ渡辺尚大谷吉之らと出て幕  
印山ふ陣一森勝永井田永應天王寺のあふ陣一  
郡良列桐号の牙旗を執り其後ふ在り治長の速

水守久伊藤長次青木一重真野宗信中島氏種野  
々村吉安堀田正高この七隊長と與ふ毘沙門池  
のあふ陣一沿房の脚宿政友と岡山ふ隊一津川  
左近金額馬表と執つて其後ふ備へ總軍鑿齊と  
一月行掛けうり移て東軍ふてハ前將軍指揮  
諸乃の部署を定む茶田利光右先鋒たり木多  
忠のまき尾とおどぞぞのまき尾とあんざくすみ  
織田勘俊を豊後守康紀遠藤但馬守守相主  
せんのまき正石川主殿頭藤田擔之助らと其右ふ在り和  
安正信土井利家酒井忠世本多忠純黒田長政加  
藤嘉明之ふ繼ぐ越前守忠直左先鋒うりを多  
忠羽小笠守秀政秋田城之助六郷兵庫頭仙石越  
赤守浅野長晟丹羽長重らと其右ふ在り神原康  
綱松平康長酒井家次稻垣重種之ふ繼ぐ大將軍  
秀忠親ら軍ふ将とし水野忠清青山忠俊松平  
定綱書院番と督一高木正成阿部正次内藤清次  
大番祖と督一並んで其前ふ在り前乃軍家康親

ら左軍ふ將とくと本多正純植村家次板倉重昌  
を多信猪内藤掃部ら之と衛る參議義直同頼宣  
其後ふ在リ井伊直孝藤堂高虎細川忠興と右軍の左  
ふ在水野猿成松平忠明を多忠政伊達政宗少羽  
忠対左軍の左ふ在リ野ふ彌り山ふ漫り左右並  
び進む前乃軍候騎と召び歎状と問ふ對て曰ふ  
其陣甚望り又秀忠の親ら出でし待ち頗る鬪ふ  
志一弓と前乃軍乃ち人質とて取うる大

野治徳ふ命ト書々作り其父治長ふ宿すも乃軍  
の候騎来り左軍ふ白ノイ日ふ大兵出づ清ふ速  
ふノ弓出るとも七万ふ過ぞ何ぞ大兵と謂ん乎  
と住吉ふ及び乃ち輿々舎き鞭々穿了左右鎧々  
進む之と斥けく曰ふ奴輩々殊を何ぞ鎧を以て  
せんやとす行衣黄掛々着て馬ふよる己ふ一丁  
ね軍秀忠至る長政嘉明出了道傍ふ渴毛秀忠甲

ノテ曹ヤキバ軍騎二十餘卒ヤ從ヘ師ヤ巡イリ朝  
ニ入ヤ見テ馬ヤ立テ之ヤ楫以二人進んヤ其銜  
ヤ執つテ曰ス入瞬昔ハ歎速く出ヤ其逃入スヤ憾  
トナリ而ノテ今日又大ツヨ出で齊ノノ其首ト  
授ム幕下の東意の如クナガニ無一ト乃軍首  
肯テ曰ス今且之ヤ剪滅んと本多正信箒輿小從  
ひ材蒂衣ふ團扇ヤ持ち蠅ヤ拂フ了過ト長政嘆  
トシ日ム所ぞ平日の威嚴ふ類セバビト嘉明曰よ

